



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 25

患者がいるフェーズから考える視点を持つ

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

研修医時代、私の患者の診かたを変えた 指導医からの教えとは

患者ごとのサマリーを定期的を書くようになると、今まで見えてこなかったことが見えてきますが、一番のポイントは「トレンドで診ること」の重要性に気がつくところです。

血液検査もバイタルサインも重要なのは、それが正常値かどうかということではなく、「どのようなトレンドにあるのか」という観点で考えることが大切です。言い換えれば、「点で診るか、線で診るか」というところかも知れません。

私が研修医時代の指導医は、私が担当患者の胸部レントゲン写真を見てスケッチしていたときに、「狭間君、そのレントゲン、写真と違って見たら失敗するよ」とおっしゃいました。

真意を測りかねている私に、「それは、写真ではなく、映画のフィルムの中の1コマだ。その前のコマもあれば、後ろのコマもある。そしてどういったコマに持って行きたいかイメージして治療するはずだろう?」と言われたのです。

そのとき、私は非常に大きな衝撃を受け、それ以後、私の患者さんの診かたは大きく変わったと思います。

今、薬剤師がバイタルサインだけでなく、血液検査や種々の臨床検査データに取り組むときに必要なのは、この視点の転換ではないかと感じます。

患者を「線で診る」ことが 「薬剤師ならではの」PDCA サイクルを回す

薬剤師がチーム医療に参画する、情報共有や多職種連携を実践する、このなかでバイタルサインや血液検

査の理解を深めて活用するということは、テーマとしてあがってきますが、薬剤師からも医師からも議論があります。

たとえば、血圧や体温の値や種々の血液検査データをもとに「この患者さんの状態をアセスメントしてみましょう」というものは、診ようによっては診断そのものになります。診断は医師が行うべきものですから、いくらスキルミックスや薬剤師の職能拡大が背景にあるとはいえ、議論と摩擦が起こるのは当然だと思います。しかしこれは、患者を「点でのみ診る」から起きている事象だと思います。

薬剤師が行うフィジカルアセスメントは、医薬品の適正使用、医療安全の確保を目的に行われるもので、薬物治療、すなわち薬物負荷がかかった状態で患者の状態がどのようなトレンドで動いているのかという、「線で診る」ことが最も重要なポイントになると思います。

換言すれば、薬剤師が治療のPDCAサイクルを、薬学的専門性に基づいて回していき、アセスメントの結果を医療チーム内で共有し、医学的専門性を持つ医師や看護学的専門性を持つ看護師とカンファレンスで論じ合うことが大切だと考えています。

これがなくては、薬剤師のチーム医療への参画の意義や、専門性の高い薬学教育の臨床現場における価値は、薬剤師のみならず他の医療従事者や患者にとって理解しづらいものになると思います。

そして、このチェックのところで、薬剤師による患者コミュニケーションのみならず、バイタルサインや血液検査は重要なツールであるが、その理解と活用そのものが目的ではないと腑に落ちるのではないのでしょうか。